

# ハモグリバエ類に対する天敵(捕食寄生バチ)を利用した防除技術の開発

農業総合研究所

## 要旨

府内全域のトマト、キュウリ等の野菜類ではハモグリバエ類(トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ及びナスハモグリバエ)の発生が多く、問題となっている。また、トマトハモグリバエとマメハモグリバエは、殺虫剤抵抗性の発達が危惧されている。そこで、施設トマトにおいてハモグリバエ類の天敵寄生バチであるハモグリミドリヒメコバチを利用した防除技術を開発した。

## 成果の概要

施設トマトで、ハモグリミドリヒメコバチ成虫をハモグリバエ類の発生初期に株当たり 0.1 匹の割合で1週間間隔で3～4回連続して放飼すると、ハモグリバエ類の生存幼虫数及び食害痕数を無放飼区の約5分の1及び約3分の1にそれぞれ抑えることができる(図1)。

放飼区で採集したハモグリバエ類の幼虫から羽化した捕食寄生バチは、ハモグリミドリヒメコバチが約7割と多く(図2)、本種は施設内に定着・増殖できる。

ハウスの開口部には1mm目合い以下の防虫ネットを展張する。また、定植直後にハモグリバエ類が多発した場合は、天敵に影響の少ない殺虫剤を用いてハモグリバエ類の密度を低下させてから寄生バチを放飼する。

ハモグリミドリヒメコバチの放飼1回にかかるコストは7,600円/10aであり、作業時間は約4分である。

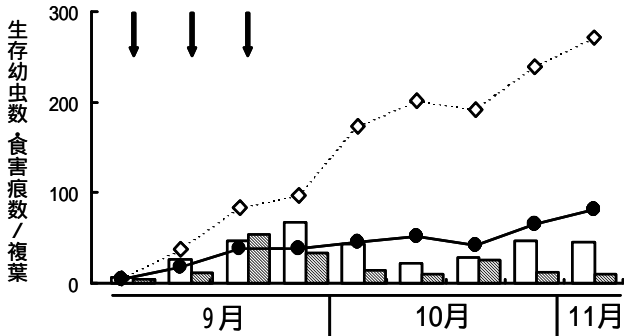


図1 各施設トマトにおけるハモグリバエ類の生存幼虫数及び食害痕数の推移  
 ■: 放飼区(生存幼虫数)    □: 無放飼区(生存幼虫数)  
 ●: 放飼区(食害痕数)    ○: 無放飼区(食害痕数)  
 ↓: ハモグリミドリヒメコバチ放飼

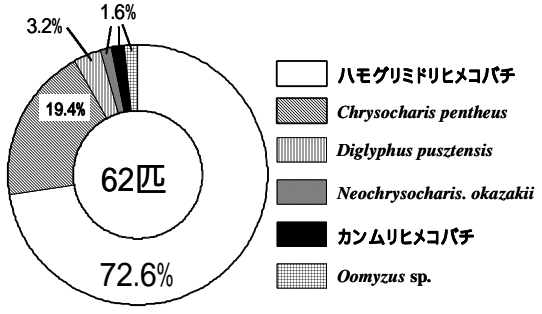


図2 放飼区で採集したハモグリバエ幼虫から羽化した捕食寄生バチの種構成

(問合せ先: Tel. 0771-22-6494)